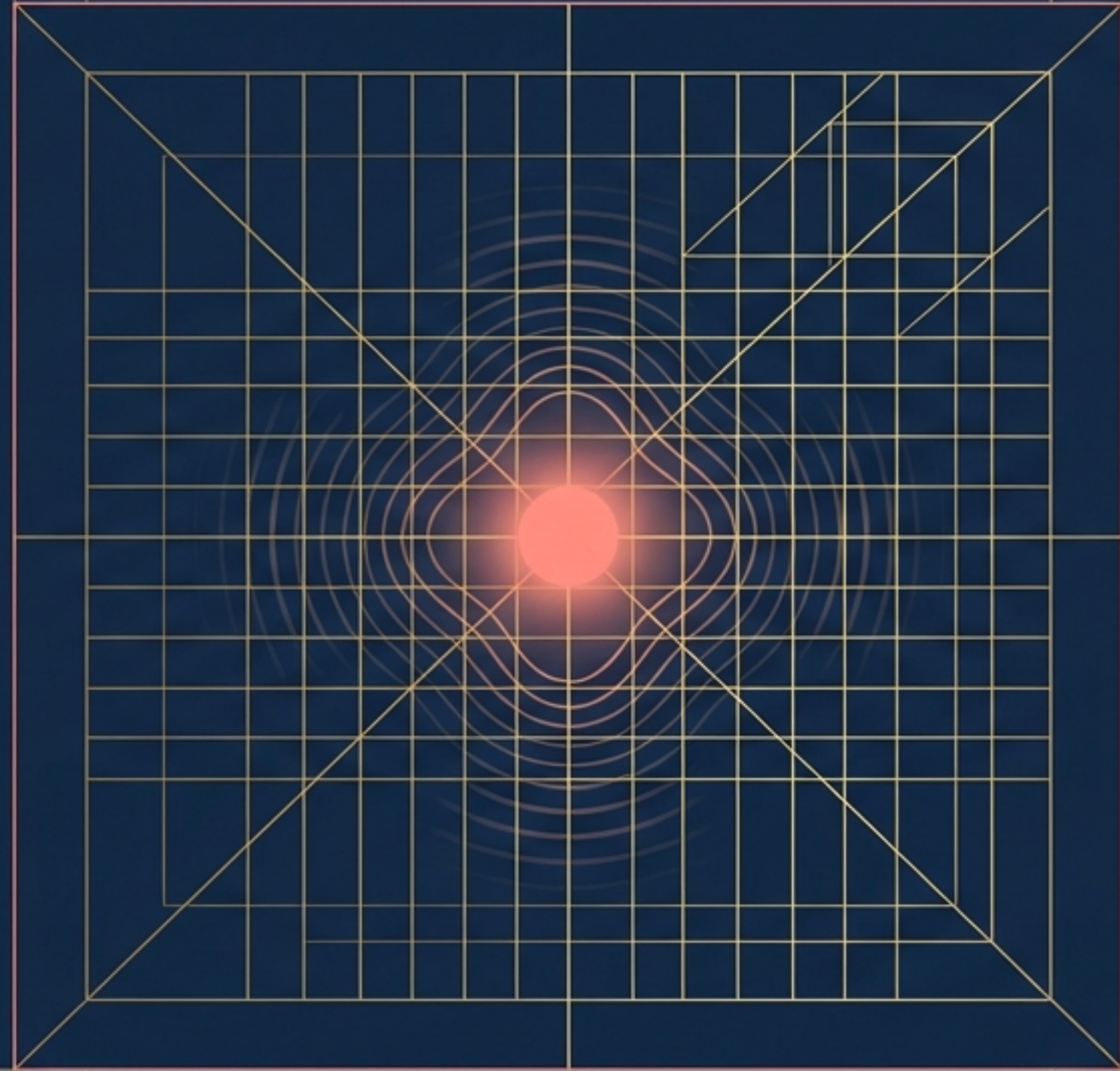


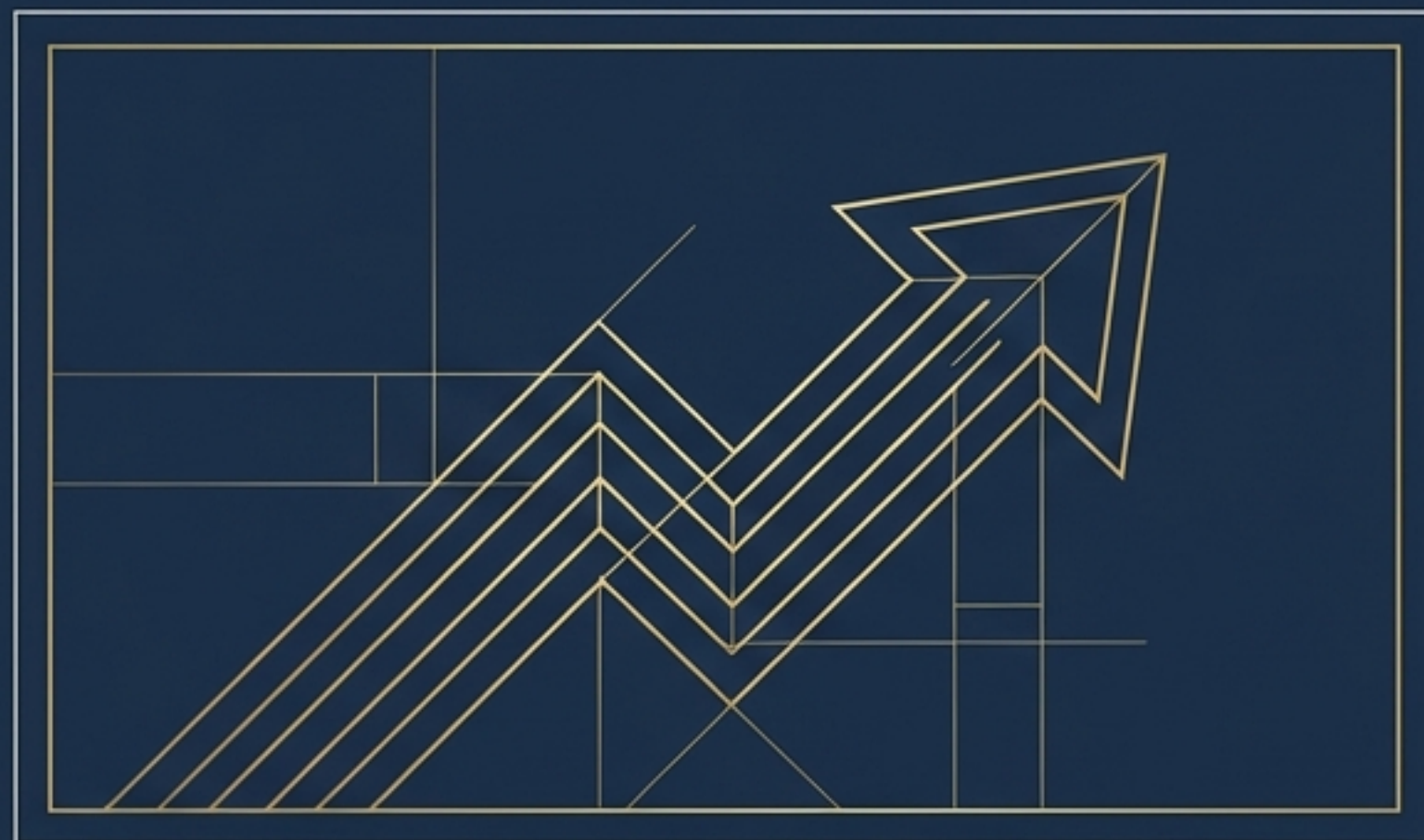
意識・AI・哲学の10原則

AI時代に「人間であること」を
問い直すための羅針盤

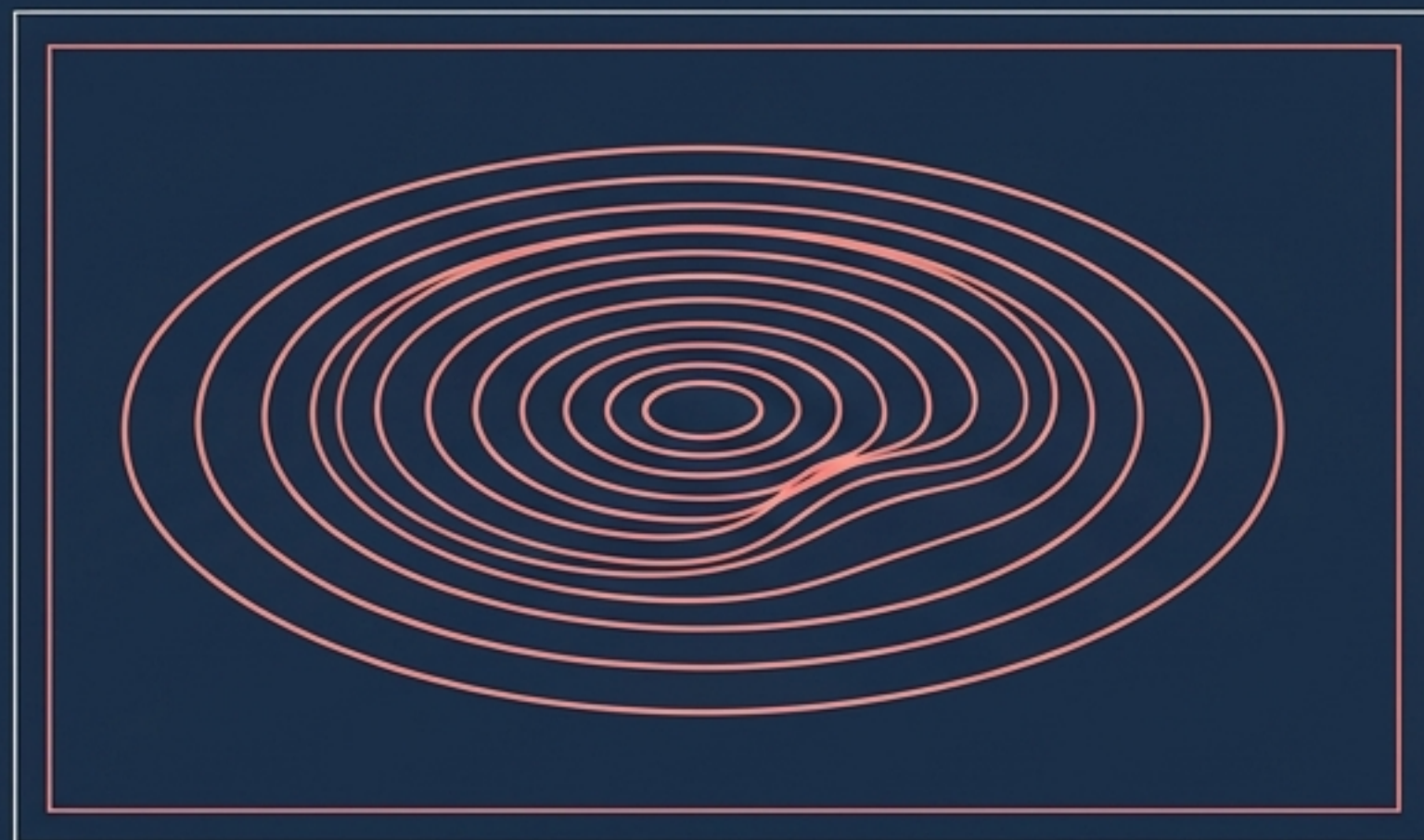
t0rapa氏の哲学・認知科学の知見から導く、10の展示(Exhibits)



テクノロジーが進化するほど、問われるのは「私たち自身」のこと



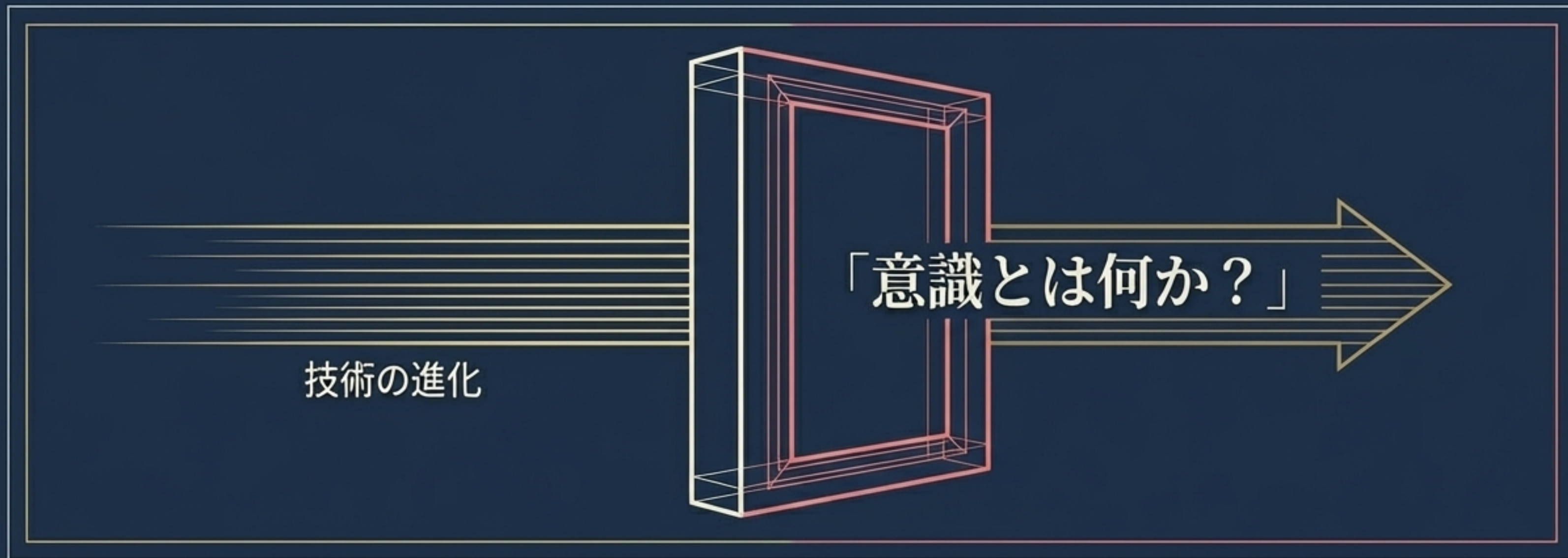
「AIは何ができるか？」
テクノロジーの機能的進化



「意識とは何か？」「感じる力とは何か？」
哲学・認知科学の深化

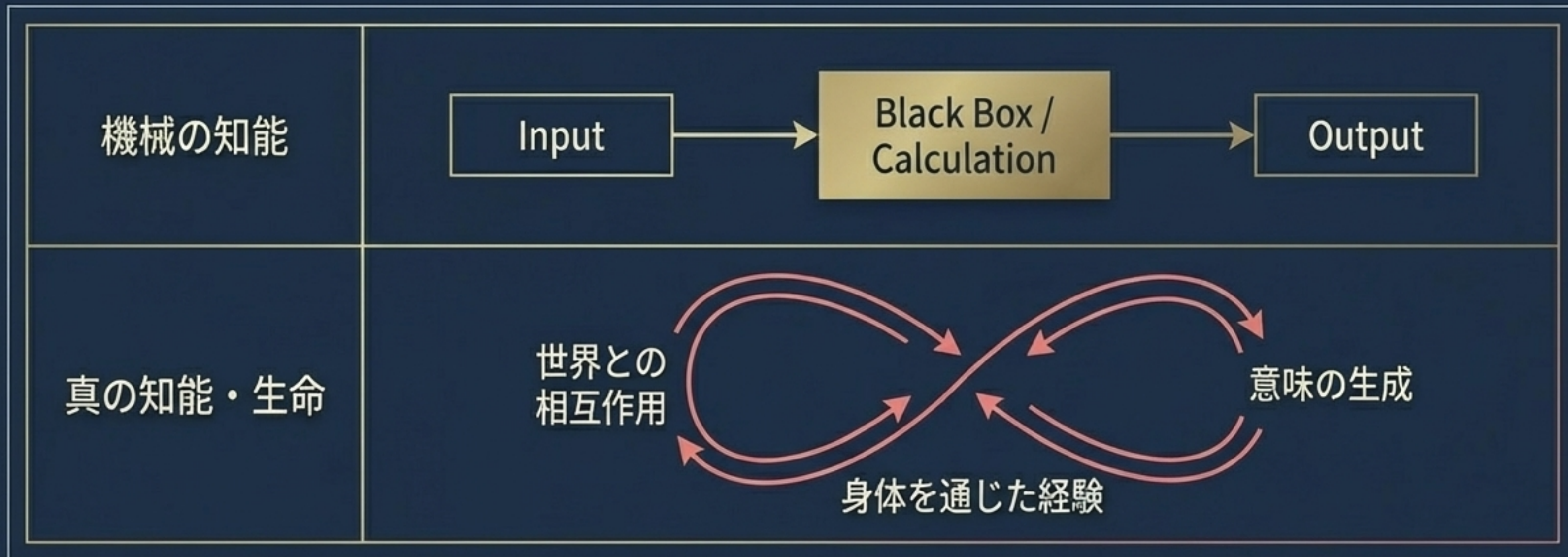
AIが流暢に話し、創造的なタスクをこなす今、テクノロジーの根底にある『心』や『知能』の本質を問う哲学的な視点が、私たち全員に求められています。

第1条 | 「意識」こそが、すべての問いの始まり



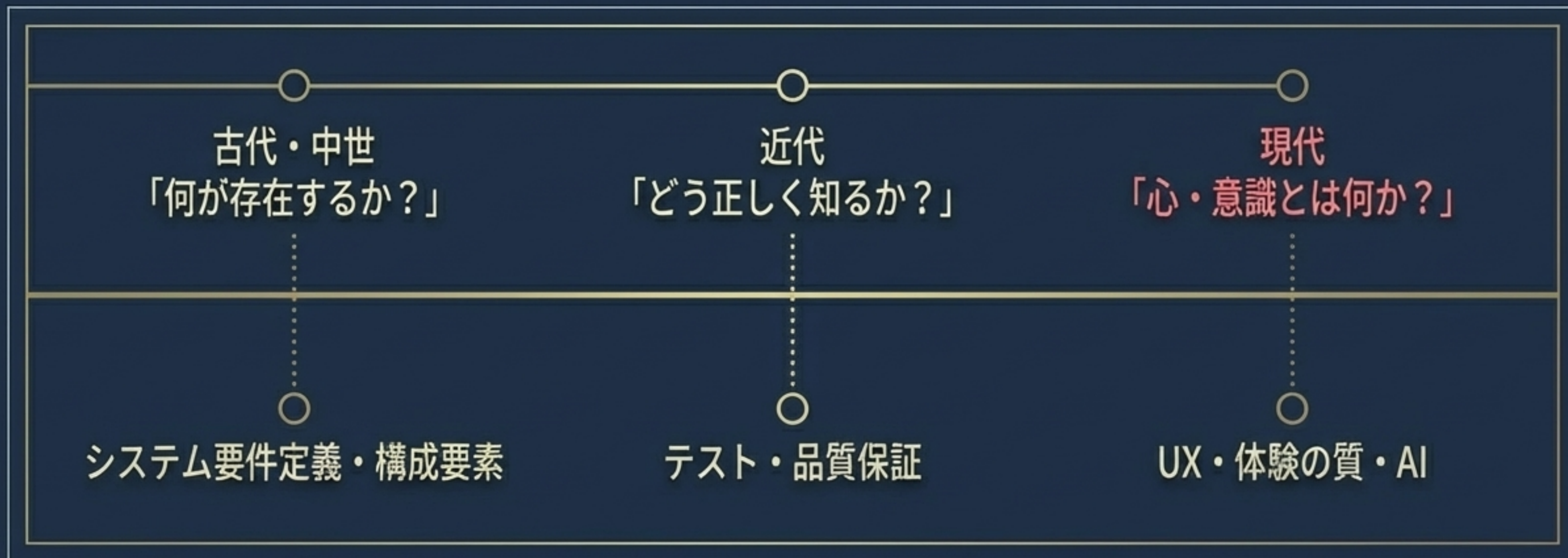
AIに仕事を奪われるか？と悩む前に、「そもそも私たちが世界を『感じる』とはどういうことか」を考えること。
機械が創造性に挑む時代だからこそ、この根本的な問いから目を背けることはできません。

第2条 | 知能とは「処理」ではなく「経験」である



知能の本質は、脳内で情報を処理することではありません。身体を使って環境と関わり、そこから「意味」を作り出し続けるという能動的なプロセスそのものです。

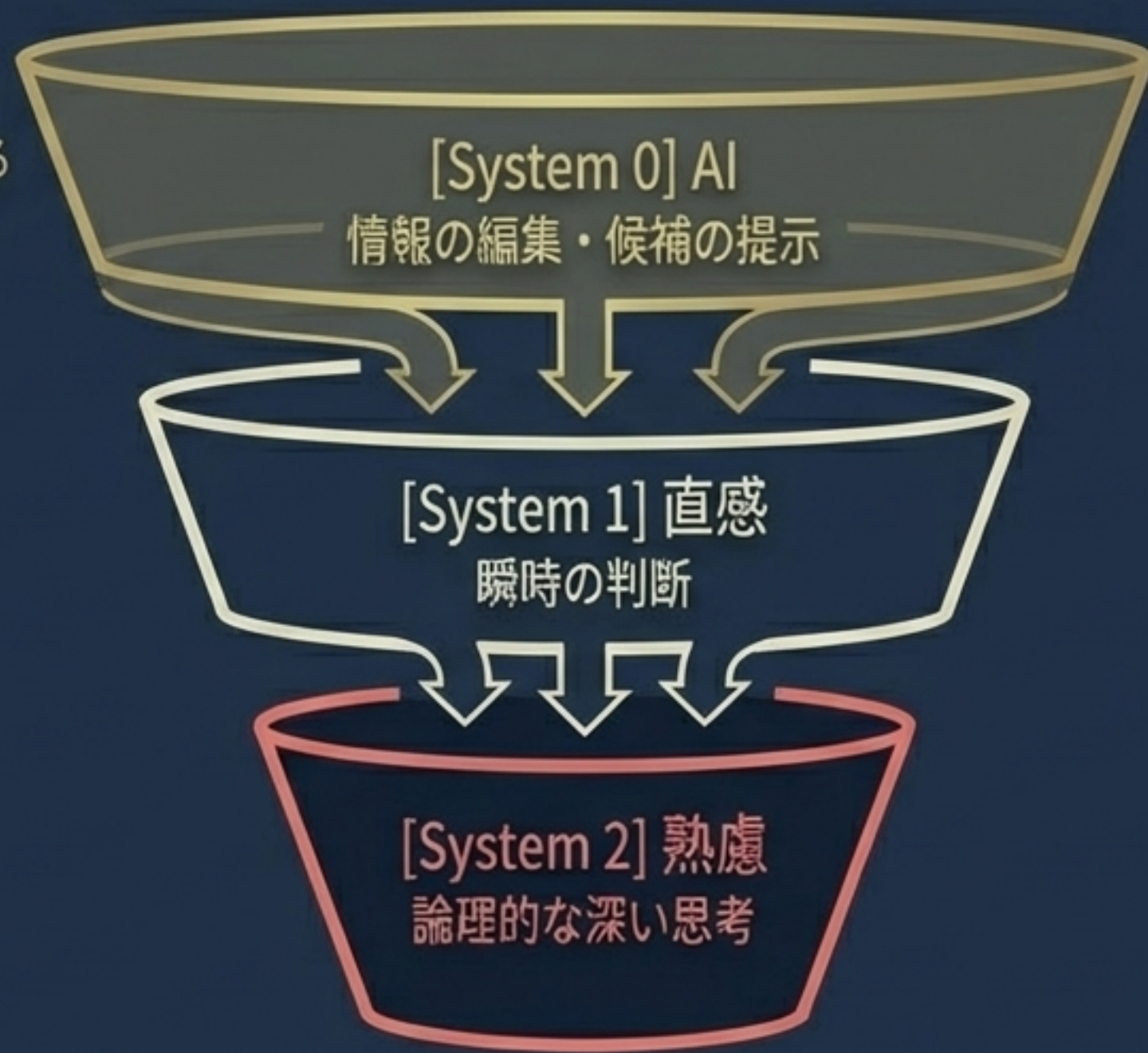
第3条 | 人類の問いの進化史



哲学は決して抽象的な学問ではありません。現代のテクノロジーやAI開発の根底にある構造を明らかにし、これからの設計を導く「実践的な知恵」です。

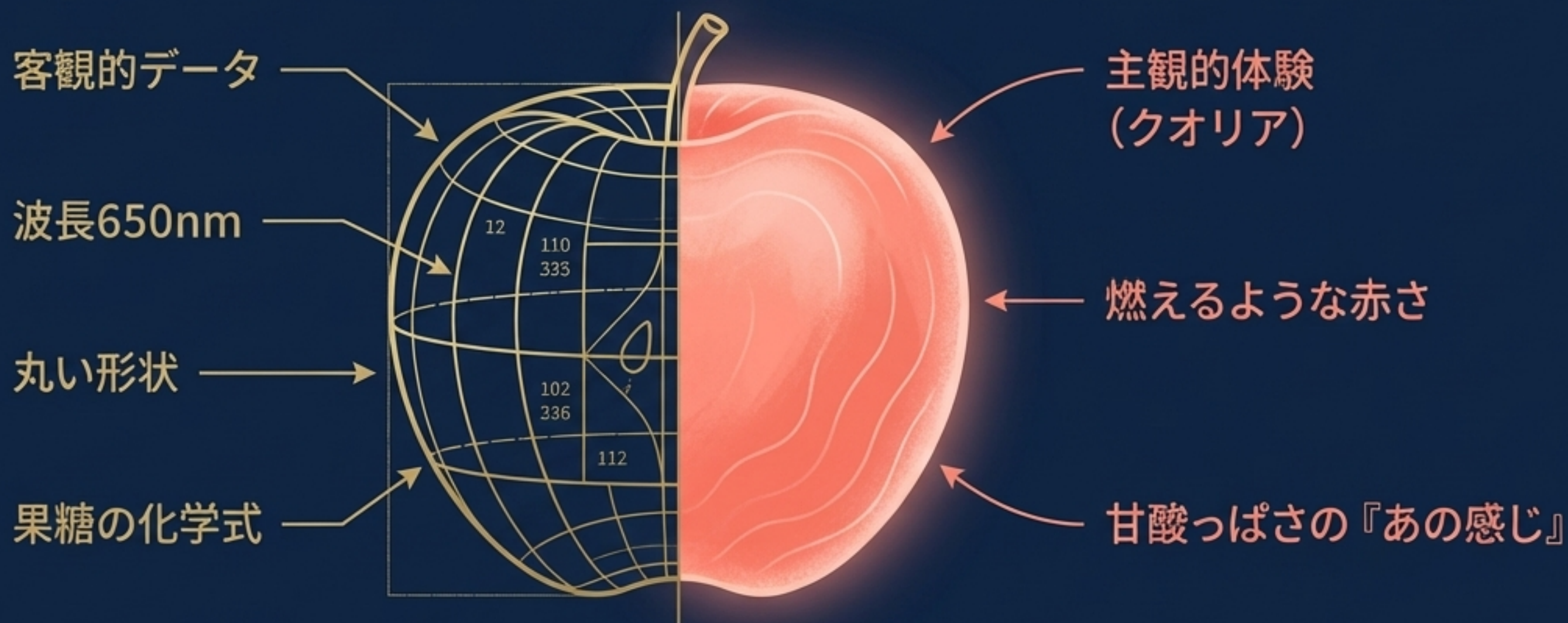
第4条 | System 0：私たちの「考え始め」を作るAI

私たちが考える
「前」に働く



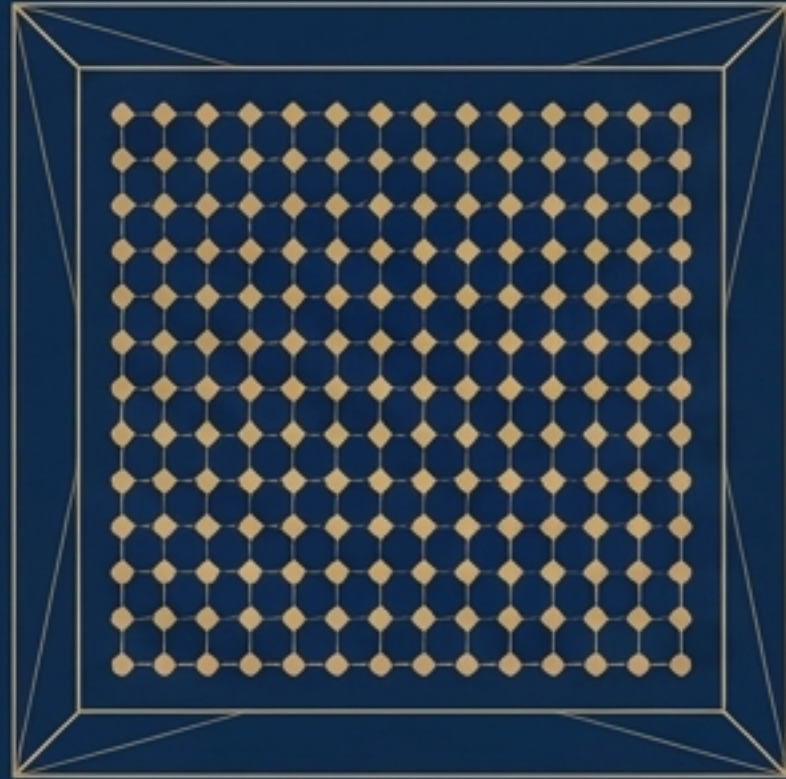
AIはもう単なる検索ツールではなく、
私たちの思考の「輪郭と入り口」を整える認
知的パートナーです。この目に見えない影響
力を自覚することが重要です。

第6条 | 「赤い」という、あなただけの特別な感じ（クオリア）



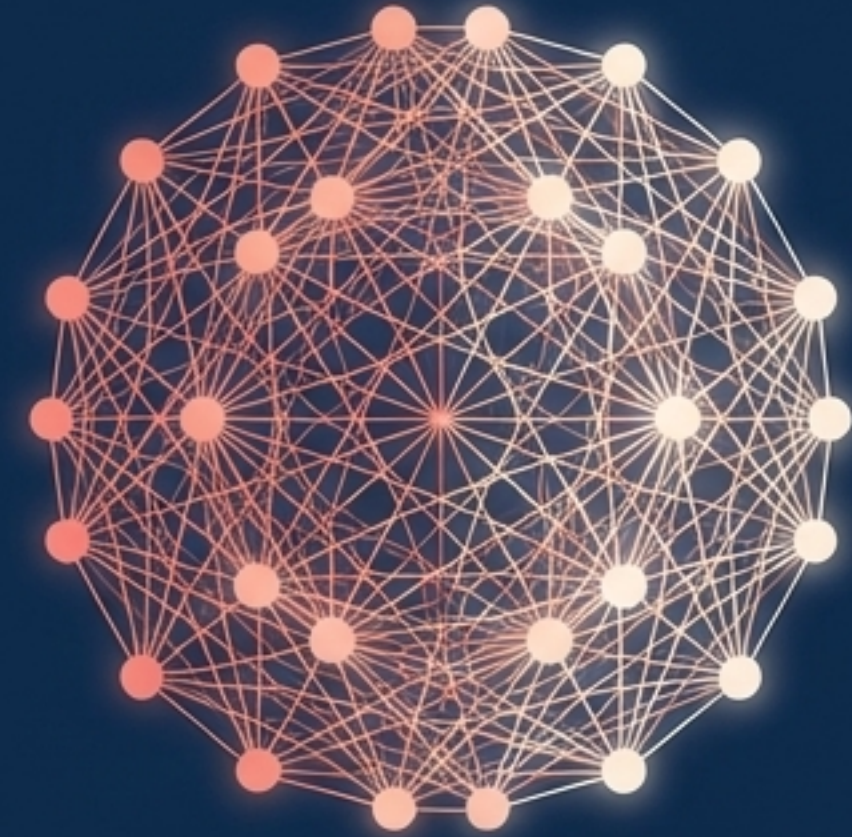
脳科学が「痛みは神経系の発火だ」と説明できても、「なぜそれが『痛い』と【感じられる】のか」という最大の謎（ハードプロブレム）は残り続けます。

第7条 | 意識は「関係性の網」から生まれる



デジカメのセンサー

$\Phi = \text{低} \cdot \text{意識なし}$



人間の脳

$\Phi = \text{高} \cdot \text{意識あり}$

意識の鍵は、情報がどれだけ「統合」されているか（関係し合っているか）にあります。
単なる情報の量や点ではなく、関係性の構造こそが重要なのです。

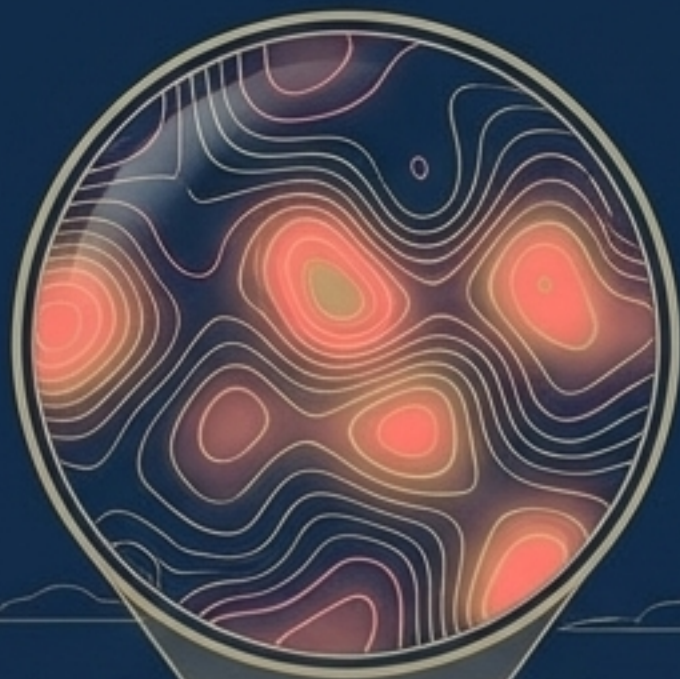
第8条 | それぞれの生き物が見ている「独自の世界（環世界）」

人間



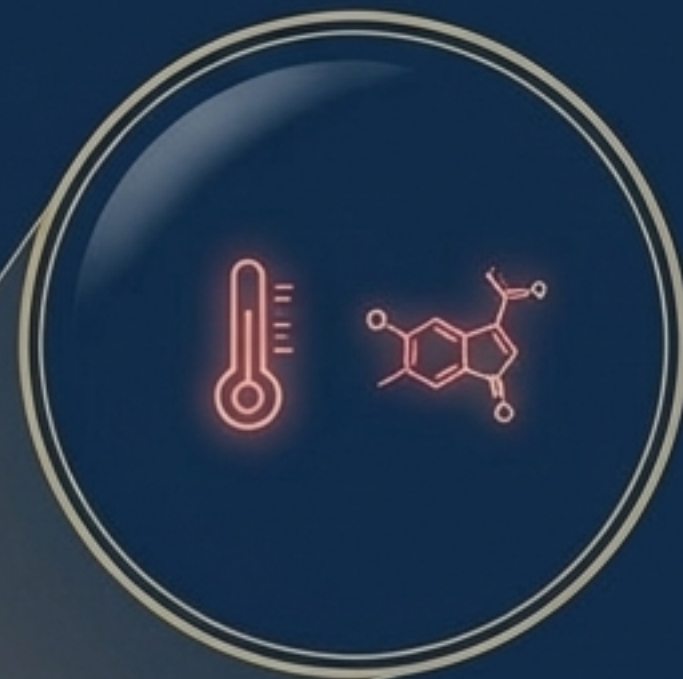
色鮮やかな花や景色

犬



匂いの濃淡の地図

マダニ

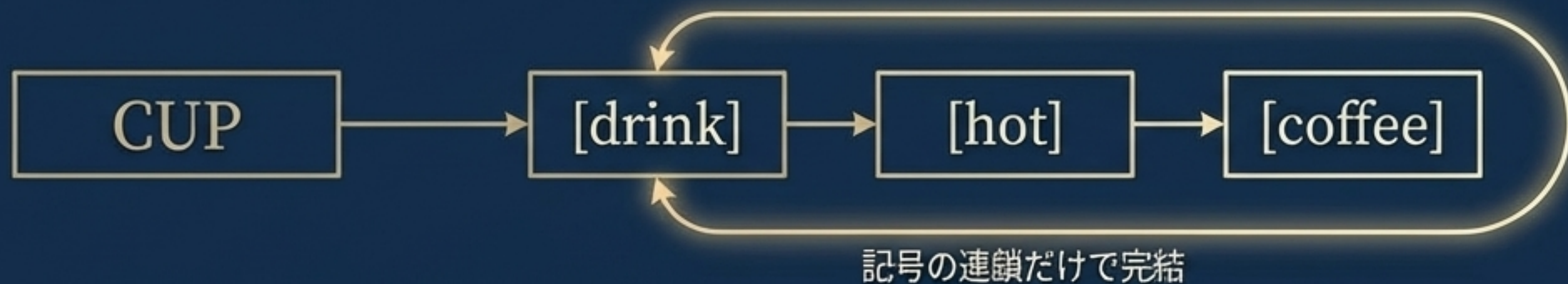


温度と特定の匂いだけの
シンプルな世界

脳が客観的な世界を映し出しているのではなく、それぞれの生き物が持つ「身体（感覚器）」を通じて、独自の世界を生きているのです。

第9条 | 意味は、身体を通じた「行動」から生まれる

AI



人間



「理解してから動く」のではなく「行動して環境と触れ合うから理解する」。これがAIにはない、身体を持つ私たち人間の知能の核心（記号接地）です。

第10条 | 解けない謎が、私たちの「自由」を創る



完成された機械 (AI)



未完成な意識 (人間)

意識が単なる物理現象に還元しきれない「未完成で謎めいたもの」であるからこそ、私たちには人生の意味を自ら創造する自由と探求の余地が残されているのです。

機械の「処理」と人間の「生」

	AI (機械)	人間 (生命)
[情報と意味]	記号の統計的処理	経験による意味の接地
[環境との関係]	与えられたデータの学習	身体を通じた「環世界」の構築
[内面の世界]	主観的体験の不在	クオリアと統合された意識

10の原則が示すのは、AIを「少し劣った人間」や「進化した人間」として比べるのではなく、まったく異なるメカニズムであることを正しく認識する重要性です。

「答え」を出すAI、「問い」と「意味」を生きる人間

AIを頼れるパートナーとして活用しつつも、身体を通じて世界に触れ、主観的な「感じ (クオリア)」を味わいながら意味を紡ぐこと。

「意識とは何か」という終わりのない問いに向き合い続けることこそが、AI時代を豊かに生きるための私たちの羅針盤となります。

